

## シスター津田 葵学長の業績

シスター津田葵学長は、1966年3月ノートルダム清心女子大学文学部英文学科を卒業し、1966年4月から1967年3月まで東海女子高等学校教諭、1968年4月から1969年3月までノートルダム清心高等学校教諭、1972年4月上智大学大学院言語学科助手（リサーチ・アシスタント）に採用され、1973年4月ノートルダム清心女子大学文学部英文学科助手（ティーチングアシスタント）、1975年4月から同講師に昇任し1976年3月まで務めた。1976年9月フルブライト奨学生としてアメリカ合衆国ワシントンD.C.トリニティ大学言語学科日本語学講師に派遣され、1978年6月から同年8月までアメリカ合衆国ワシントンD.

C. International Center for Language Studies 日本語講師、1981年4月ノートルダム清心女子大学文学部英語英文学科助教授に昇任、1986年4月同教授、1989年4月ノートルダム清心学園理事及びキリスト教文化研究所所長を経て、1991年4月に大阪大学言語文化学部教授に採用された。

その間、1973年3月上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻修士課程を修了、1980年12月ジョージタウン大学大学院言語学科博士課程を修了した。その後、1995年4月大阪大学大学院言語文化研究科教授に配置換となり、2007年3月31日をもって定年退職した。

津田の研究領域は、社会言語学、特にコミュニケーションの民族誌の枠組みによる多様な発話事象の分析である。津田はこの分野において先駆的な研究を行い、日本における社会言語学の発展に多大なる貢献を成した。特に、1980年代に著書『英語コミュニケーション論』、『英語学体系第6巻』などを通じて欧米における社会言語学の研究成果を積極的に紹介するとともに、日米のビジネス・コミュニケーションについてフィールドワーク、アンケート、インタビューを用いた実証的研究を行い、その成果はデータ分析を中心に論じ、国際化する言語生活の中での伝達体制の構築について明快かつ体系的な視座を提供した。その研究は、著書 *Sales Talk in Japan and the United States : An Ethnographic Analysis of Contrastive Speech Events* にまとめた。当時、日本における言語使用の研究は、方言学を除いて言語学と隣接諸科学的手法を駆使して研究する学問的背景が充分ではなかった。これらが当時まだ揺籃期であった日本における社会言語学に与えた影響力は計り知れない。また、津田の研究対象はこれにとどまらず、宗教（キリスト教と仏教）における言語、小笠原諸島における言語接触、言語変化、文化変容などと幅広い。さらに、日本における国際化時代の到来を鑑み、帰国子女の言語行動と文化受容について考察し、またこれからの英語教育のあり方に関する提言を行うなど、現代社会と積極的に関与してきた。2001年からは、日本における多文化共生の問題に着目し、翌年2002年以降は、大阪大学21世紀COEプログラム<sup>1)</sup>「インターフェイスの人文学」事業推進者として言語文化研究科の研究グループ「言語の接触と混交」の中心的な役割を担った<sup>2)</sup>。この間、

国際シンポジウムの開催や研究成果報告書の執筆・編集などに携わった。こうした研究活動は、著作を通じてのみならず、国内外で開催された国際学会での口頭発表及び招聘講演という形でも学术界に発信された。また、『大阪大学新世紀セミナー：コミュニケーションの日米比較』を著するなど、啓蒙活動にも熱心に関わってきた。

大阪大学では、授業及び研究発表会、また論文個別指導などを通して、多くの学生を育成してきた。津田が指導した学生の中から、多くの者が国内外の社会及び研究教育の場で現在活発に活躍している<sup>3)</sup>。また全学共通教育における英語教育でも、学習される対象の一科目としての英語というより、コミュニケーションの手段として活用される英語をめざし、コミュニケーション能力の向上を最優先した教育を行った。

また、研究科の運営及び学内の運営に関して、言語コミュニケーション論講座分野代表者、英語教育講座主任、また、入学試験委員会、教職課程委員会、図書館委員会、附属図書館豊中地区運営委員会、制度委員会、国際交流委員会、総合学術博物館運営委員会、入試委員会の学内委員会委員等を歴任し、大阪大学の管理運営に貢献した。

学会活動においては、日本言語学会、日本大学英語教育学会、日本英語学会、日本社会言語科学会、国際語用論学会、国際機能言語学会、国際大学英語教育学会の会員として活躍し、特に国際語用論学会の機関紙である *Journal of Pragmatics* の論文審査を担当、これらの活動を通じて国内外の学会の発展と学術の振興に多大な寄与を行った。

- 1) COE は Center of Excellence という意味で卓越した研究拠点である。  
[Http://www.isps.go.jp/j-21coe](http://www.isps.go.jp/j-21coe) 参照。
- 2) それぞれの文化が複合文化と接触することにより、ダイナミック（インターフェイス）な姿をとらせ、そこから人文学の研究の様相を統合的に再検討することを目的とした。具体的には7つモデルに分けられ、そのうちの1つ「言語の接触と混交」が津田班の研究テーマと設定した。その構成メンバーは教員4名、大学院生5名、RA1名の10名であった。その成果は2002年～2006年にかけて以下の5冊にまとめられている。

工藤真由美・津田葵（編著）2003『言語の接触と混交—日系ブラジル人の言語の諸相』大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」 2002・2003年度報告書 大阪大学

津田葵・真田信治（編著）2005『国際シンポジウム「多言語・多文化社会としての日本の現状と課題」大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学国際シンポジウム報告書 大阪大学

津田葵・真田信治（編著）2005『言語の接触と混交—共生を生きる日本社会』大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書 大阪大学

津田葵・真田信治（編著）2006『共生を拓く日本社会』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書 大阪大学

津田葵・真田信治・工藤真由美（編著）2007『言語の接触と混交第 6 巻』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書 大阪大学

3) 津田ゼミを巣立った国内外の主な教育・研究者は以下の通りである。

氏名	所属
1 眞崎(横田)睦子	北海道大学(2017 年逝去)
2 大河原眞美	高崎経済大学
3 高木智世	筑波大学
4 藤森弘子	帝京大学(東京外国語大学名誉教授)
5 本田厚子	元 専修大学
6 松尾慎	東京女子大学
7 呉恵卿	国際基督教大学
8 日比谷潤子	元 国際基督教大学
9 谷智子	東洋大学
10 原由紀恵	清泉女子大学
11 長尾敦子	東洋英和女学院大学
12 根本知代子	川村学園女子大学
13 松永稔也	東海大学
14 初鹿野阿れ	名古屋大学
15 林誠	名古屋大学
16 高阪香津美	愛知県立大学
17 藤原智栄美	立命館大学
18 リリアン・テルミ・ハタノ	元 近畿大学
19 服部圭子	近畿大学
20 永田高志	元 近畿大学
21 高橋朋子	近畿大学
22 井村誠	大阪工業大学
23 森本郁代	関西学院大学
24 嶋津百代	関西大学
25 仲田陽子	大阪大学
26 新庄あいみ	元 大阪大学
27 梅本仁美	大阪大学
28 義永(大平)美央子	大阪大学
29 中谷潤子	大阪産業大学
30 高木佐知子	大阪府立大学

31 前村奈央佳	関西学院大学
32 西條さゆみ	神戸大学
33 松本曜	神戸大学大学院
34 松田謙次郎	神戸松蔭女子学院大学
35 鈴木佳奈	広島国際大学
36 吉川友子	香川大学
37 谷崎和代	元 鹿児島純心女子大学
38 関口やよい	元 琉球大学
39 崔信淑	北京林業大学(中華人民共和国)
40 郭毓芳	逢甲大學(台湾)
41 羅曉勤	銘傳大學(台湾)
42 加藤真理	Vector International Academy(カナダ)

(「大阪大学理事会資料」を基に作成)

2007年3月に、大阪大学言語文化研究科を定年退職した後、常磐大学人間科学研究科に招聘され、2012年3月までの7年間、教育・研究に尽力した。常磐大学は被害者学の講座が開講されており、当時、日本の大学で唯一の研究分野として国内外から注目を集めていた。常磐大学の被害者学研究所にはドイツ人、インド人、アメリカ人と日本人の先駆的な研究者が名を連ね、世界のホームレス研究で著名なキルシフオッフ教授も在籍していた。津田は同教授から誘われ、大学院生を含めた4人で研究に着手した。まず、日本におけるホームレスの人々が集まっている東京の上野公園でのフィールドワークから始め、大阪の釜ヶ崎でのアンケート調査（「ホームレスの日常生活における被害とトラウマー釜ヶ崎調査の分析一」（2013）参照）からホームレス993名の実態を浮き彫りにした。特にホームレスの人々の日常生活での被害状況を明らかにし、トラウマとその影響要因を量的に解明することを試みた。

また、日本における外国人労働者数の増加による「内なる国際化」に起因する現状と課題に目を向けた。その背景には、日本のカトリック教会での外国籍の人々の数が時間とともに増加し、多文化・多言語共生社会に向けての課題が随所で耳にされるようになってきたことがある。特に茨城県のカトリック教会で日系ブラジル人の保護者・子どもたちに日曜学校で教師として接する機会が増えるにつれ、津田は外国籍の子どもたちへの教育・日本語・母語保持教育の必要性を感じるようになった。この観点からの研究テーマは「日本社会における外国籍の人々の状況」（2012）に著されている。

以上のように大阪大学言語文化研究科退官後は1) ホームレス研究 2) 外国籍の保護者・子どもたちの言語生活 3) それに付随した文化の様相を質的、量的両側面で解明した。

(2020年8月現在)